
誘拐喜劇

行平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誘拐喜劇

【Nコード】

N3248J

【作者名】

行平

【あらすじ】

誘拐されたのは、万引きした商品。

「妙だね」

「妙でしょう」

「何がですか？」

君は、彼らが話し込んでいるところへ割って入って、こう訊ねた。彼らは、その時初めて君がそこに居る事に気づいた。

よほど真剣に話し込んでいたか、君の影がよほど薄かったかのどちらかだろう。

「それがね、103号室の子がいたろう……、名前なんだったかねえ、やだよ物忘れが激しくて」

「佐藤とか鈴木とか、よくある名前じゃったの」

「村崎さんですよ」

二人のやり取りを聞いていられないとばかりに君は言った。

「その人が、どうかしたんですか」

「奇声が聞こえてくるんだよ。やかましくてしょうがないからって隣近所から苦情が来てね」

「おかげで大家さんもこうして仕事ができるわけでの」

「あらやだ、あたしゃ汗水たらしてやってますよ」

「久しく見なかったようじゃがの」

「色々忙しいのよ、あんたの知らないところでは、それはもう身を粉にして」

「ふえ、ふえ」

大家さん大気炎の体である。アパートの住人らしきおじいさん、それを見て、妙な笑い方をした。おおかた、入れ歯をし忘れたのだらう。

これでは一向に話が進まない。君は焦れた。

「それで村崎さんは今……？」

「そうそう、最近、奇声が聞こえなくなっと思ったたら、今度はや

けに静かになつてね。気味が悪いくらいだよ」「
うるさくても静かでも苦情を言われる村崎さんが少々気の毒である。

「人の気配もしよらんで、よもや死んどりゃせんかと思って、また大家さんと呼んだんじゃ」

そういうわけで大家さんは103号室の前に、おじいさんは山へ芝刈りに……、ではなく、ここで大家さんと話し込んでいたわけである。そこへ105号室の住人である君が　アパートには104号室はないので、事実上隣の部屋へ　帰って来たところ、彼らに出くわした、というわけだ。

「ところであんた、こんな昼間っから何してんの」
忘れたわけではあるまいね、家賃はきっちり払ってもらわないと追い出すよと言わんばかりの勢いである。

君は辟易しながら、
「ああ、アルバイトなんで、今、帰って来たところでした」
揉み手で、へえ、とでも言いそうな具合でこう述べた。接待相手の機嫌をとる社員さながらである。

なんとなくとも強く出られるとびくついてしまうのが君の性質だから、この時も大家さんの視線が矢のように背中に刺さるままにして、さつさと部屋へ入ってしまった。

刺さった矢を背中から抜いて部屋にどっかと座った君は、はて隣人はどうしたろうと耳を澄ましてみるが何も聞こえない。

煙草に火を点け一服する。ふう、と紫煙を吐き出した。

その時、電話が鳴った。電話の相手は言う。

「お前、村崎さんって知ってるだろ……そう、あの先輩……どうやら誘拐されたらしい」

「ふうん誘拐か……、え、ゆ、誘拐!？」

「今、出られるか」

君は慌てて部屋を出て、電話の相手の家へ向かった。

「なに、なにが」

どもる君を遮って、相手は答えた。

「まあ、あれだ」

相手は言う。

どういうことだよ？

そう君が思うのも無理はない。

そこに村崎さんがいたからだ。

「誘拐だなんて嘘、なんで吐いたんだよ岩木」

「お前をからかう為だよ」

「はあ？」

因みに岩木というのは相手の名前である。その岩木は、くつくつと笑っている。

「冗談、冗談。まあ聞けよ」

君の反応を見て面白がっているところから察するに、からかうためというのは半分は本音だろう。

「まあ座りなさいよ」

「もう座ってます」

「村崎さんを、かくまおうと思うんだ」

「かくまうって……、なんかしたんですか、村崎さん？」

ここで初めて村崎さんが口を開く。

「私は何も……」

「最近」

と岩木が横から口を挟む。

「ストーリーされてるんだそうだ」

「警察には？」

「何されたわけではないから警察は動いちゃくれないさ。だが何かあつてからじゃ遅いだろ」

「でも、かくまうって、どうするんだ？」

「しばらく、うちに寝泊りしてもらつたさ」

え、と君は驚いた。村崎さんは女性である。男の部屋に泊まるのは少々問題があるように思われる。岩木は見透かしたように、

「なにもしないよ」

と言いながらにやにや笑った。岩木の隣に座っている村崎さんは頬を赤らめている。

「ああ、それで……」

君は先ほどの大家さんたちとの会話を思い出して、

「しばらく静かだったんですね」

と言った。

「でも、あの奇声は……？ あ、ストーカーされて追い詰められてノイローゼになっちゃって」

頭の調子がおかしくなったのか、という言葉は飲み込んだ。

「あ、あれは……」

村崎さんは耳まで赤くなって、言った。

「最近、趣味でバイオリンを始めたんです」

しかしその音があまりに酷いため 要するに下手なため 身の毛もよだつ奇声に聞こえたようである。

そもそもアパートでバイオリンを弾くあたり、どうも村崎さんはどこか抜けているようだ。

「ちよつと待って、今頃、大家さんが村崎さんの部屋に入っているんじゃないか」

「夜逃げ同然だな」

見渡すと、村崎さんの持ち物はすでに岩木の部屋に持って来ているようだ。

「もぬけの殻ってわけだ」

はた迷惑である。

「さ、じゃあ例によって、いきますか」

岩木のその台詞を合図に、君と村崎さんは居住まいを正した。

「今日は」

君と岩木と村崎さんの三人は今、CDショップにいる。

村崎さんはCDを選んでる。

といつても、買い物に付き合っているわけではない。

では何をしているのかというと、岩木は店員の死角になる場所に居て、大き目のバッグにCDを詰め込んでいる。

陳列棚を隔てて、君がいる。

岩木が、詰め込んだ後にバッグを投げて、それを棚越しに受け取るというのが、君の役割である。

君は不審がられないよう商品を選んでるふりをしながら様子を窺っている。

すると、ヒュツと口笛が聞こえた。

合図だ。

構えて待つ。

バッグが頭上から降ってくる。

キャッチに失敗してしまった。

バタバタ、ガシャン、と大きな音が辺りに響いた。

君は慌てた。

店長と店員が音に気づいて音のしたほうへ駆けつけようとする。

ここで村崎さんの出番である。

買い物客を装い、店長を引き留める。店長は店員に指示を出して向かわせる。

その隙に君と岩木は悠々と店から出る、という寸法だ。

「割れてないかな」

店から出たところで、君は心配そうに言う。

「中身が壊れないよう、バッグにちよっと手を加えてある」と岩木。

「今回はうまくいきましたね」
後から追いかけてきた村崎さんが、息を弾ませながら言った。

このようにして手に入れた、というか万引きしたものは、売ってお金にしている。

こんなことをしているからには、よほどお金に困っているのかという、それがそうでもない。

君は貧乏浪人生、とはいえ実家からの仕送りがある。

岩木の家はごく一般的な中流家庭である。スリルに味をしめて遊び感覚でやっている。

村崎さんに至っては、親が大手の会社の社長、つまり社長令嬢なのである。ただ、盗癖が病的なだけのことである。

村崎さんが何の先輩かという、万引きの先輩であった。ある日、君は書店で、コミックを一巻から最新刊までごっそりバッグに詰め込んでいる女性を目撃した。それが村崎さんだった。

君は店員を呼んだ。その時の店員が、悪いことに、岩木だったのである。

これが三人の出会いである。

打ち合わせはいつも岩木の家でしていた。

その日も君は打ち合わせのため部屋を出た。

また大家さんとおじいさんがいた。

「ちよつと吉見君」

物語がだいぶ進んだ今になってやっと君の名前が出てきた。大家さんは、君の名前は憶えていたようだ。

声をかけられて、君は立ち止まる。

「はい？」

「この人、ほら、村崎さんって子。どうしたか知らない？」

「ああ……」

少し考えてから、

「……いやあ、僕はちよつと知りませんねえ」

とぼけることにした。

何で僕が知っていると思ったのか、と君が訊くと、

「ほの字なんじゃろ」

おじいさんが言う。

「な……、そんなことは」

「もしかして、これかい？」

大家さんは小指を立てる。

下世話な人達だ。君は憤慨するかと思いきや、あからさまに動揺し、返事に窮した。

「ぼ、僕、急いでますんで」

と言い残して、逃げるように立ち去った。

岩木の家に着く。早速、作戦会議が始まる。君は、村崎さんをまともに見ることができないでいた。

「、という感じでいこう。いいいね?」

君は上の空で、岩木の言葉が聞こえていなかった。

「あ、え?」

「おいおい、何だよ、ぼうつとして。まさか恋煩いじゃないだろうね」

岩木は、にやにや嘲るような笑いを浮かべている。

「ばかな」

と言う時、声の上擦った。

「それより、今回はちよつと遠いようだね」

広げられた地図に視線を移し、話題を逸らした。

岩木は、黒ぶち眼鏡をかけてから、地図に視線を落とす。

「そう。で、今回は車を出す」

「岩木のか?」

「いや、レンタカーが無難だろう」

「ばれて追いかけられた場合、ナンバーを憶えられたらまずいもん
な」

「自分の車に傷を付けたくないからだ」

「え?」

「計画にも運転にも自信はあるが、万が一ってことも考えられる」

「そういう理由なんだ……」

「そうだ」

まだローンも残ってるしな、と言う岩木の、黒ぶち眼鏡の奥の目は真剣そのもので、冗談で言っているのではなく、本人は至って真面目である。

その頃、村崎さんかというと、バイオリンの練習をしている。

チームワークが良いのか悪いのかよく分からない三人である。

決行日当日。

レンタカーの車内にて。

「うっ」

ぐん、と体がシートに押し付けられ、君は岩木を見る。

岩木の目が妖しく閃いた。

運転をする時、性格が変わる人がいるそうだが、岩木はスピード狂の類いである。

がががん車線変更をし、前方車両をどんどん追い越していく。遙か向こうの信号が明滅を始めた。

この時、岩木が踏んだのは、ブレーキではなくアクセルである。信号が赤に変わると同時に交差点を突っ切った。

君は肝を冷やした。

岩木は、いい気なもので、口笛などを吹いている。

「い、岩木」

「なんだ」

岩木はフロントガラスを凝視したまま返事をする。相も変わらず鋭い眼光を放っている。

君は逡巡してから、

「あ、安全運転で頼むよ」

と、殆ど哀願に近い懇願をした。

「大丈夫だ」

言いながらハンドルを切る。

スピードを落とさずカーブを曲がるのだから、何が大丈夫なんだから分からない。

ヒュウツと、口笛を鳴らした。岩木の、気分が昂揚した時の癖なのだろう。

目的地に着いた時、君は胸を撫で下ろした。
岩木と付き合うのは命懸けである。

いつものように三人は位置につく。乗り物酔いをしやすい君は、気持ち悪くなっていた。深呼吸をする。

そして、岩木からの例の合図。
ヒュッ。

瞬間的に緊張する。条件反射というやつだ。胸のムカつきを堪えながら構える。

ふっ、と息を吐いて、降ってくるバッグをキャッチする。今度は落とさなかった。

そのまま出口へ向かう。

店内では三人一緒に動かないで、店を出てから落ち合うことになっている。

この日は駐車場で落ち合うことになっていた。車のほうへ向かう途中、君は深呼吸をした。

どん、と人がぶつかった。思わずよろめいた。

君が、茫然自失の様子で駐車場で待っていると、後から来た岩木と村崎さんは、ちよつと不思議そうな顔をした。

「どうした、吉見」

岩木は君を見て、やや不安げに訊いた。

「やられた」

君の声は泣きそうだった。

バッグが盗まれたのだ。

「置き引きだ」

君が胸のムカつきを治そうと深呼吸した時、ほんの一瞬だけバッグを床に置いた。その一瞬の隙を突かれて盗まれたのだ、と君は説明した。

岩木は呻いた。

「盗んだ物を盗まれたんだ」

君は自嘲ぎみに笑った。

「盗んだ人は中身が盗品だと分かったら、びっくりしますかね」
村崎さんはさも愉快そうに言う。

「万引き犯が置き引きに遭うとはね」

岩木は面白くもないといったふうである。

車に乗り、君と村崎さんを見て、岩木は呟くように言った。

「追うぞ」

君は助手席から岩木の横顔を見詰めながら、

「は？」

と聞き返した。

「シートベルトしっかり締めとけよ」

まっすぐ前を向いたまま言う。

「追うって、どうやって」

とつぐに見失ってるのに、と君が言うと、

「バッグに発信機が付いている」

と、岩木は眉ひとつ動かさずに言った。

「え」

「手を加えてあるって言ったろ」

君は、岩木の用意周到ぶりに感心したのと同時に、そこまでするかた呆れた。

ぐつと重力を感じた。

急発進したのだ。

君は、酔い止めを飲んでくるべきだった、と後悔した。

後部座席では、村崎さんがキャツキャとはしゃいでいる。

「あれだ」

岩木が呟いた。

ある車から発信されている。

置き引き犯も車だったのだ。

その後ろに、ぴつたりくつついた。

「ま、待て」

君が言うが早いか、岩木は戦闘モードに入った。

カーチェイスである。

岩木はまたヒュウツと口笛を鳴らした。

君は、ぐんぐん景色が後ろに流れていくのを眺めながら、生きて

帰れるだろうか、と心配していた。

「撒かれた……」

岩木は、物を取り返せなかったことより、相手にうまく逃げられたほうに対して悔しがつている。それほどまでに自分の運転に絶対の自信を持っていたのである。そんな岩木の様子を横目に見ながら、君は、命あることに感謝していた。

今、三人は、岩木の家にいる。撒かれてから、そのままここへ戻ってきたのだ。

「ナンバーを憶えてないんですか？」

村崎さんが訊く。

「意味ないよ。おおかた盗難車だろう」

岩木が応える。

「それに、物が物だしね」

君が補足する。

自分たちも窃盗した商品だから警察に通報するわけにもいかない。

三人は押し黙った。

その沈黙を破って、電話のベルが鳴り響いた。

「はい、岩木です。 え？」

心底驚いている岩木の表情を見て、君は何事かと訊ねた。

電話を切ってから、岩木は応えた。

「バッグを誘拐した犯人からだ」

「誘拐っていうか」

「窃盗じゃないか、と言った君に、そうですよねえ、と村崎さんが同意する。」

「あれを売って金にすればいいものを。何が目的なんだ」

「君が疑問を口にすると、それに答えるように岩木は言う。」

「バッグを返してほしければ、指示に従え、と言っていた」

「僕たちが、万引きをしたのを知って言ってるのか？ だとしたら、強請^{ゆすり}か」

「俺らが金を持っているように見えると思うか？」

「まあ恐喝し甲斐はないだろうね」

「村崎さんをこちらに渡せ、と。バッグは人質ならぬ物質^{ものじち}といったところだ」

「なんだって」

この『なんだって』には、驚いた『なんだって』と、『なんだってそんな遠回りなことを』の二つの意味が込められている。

「村崎さんの親に身代金を要求する、それが目的だろうな」

「村崎さんを誘拐するためにバッグを誘拐した、ってわけ？」

「村崎家はお金持ちだから無理もないな」

村崎さんを差し置いて喋る二人の会話を聞いて、当の本人は気が気でない。

「ちょ、ちょっと、まさか取引に応じるわけじゃ……」

「営利目的なら危害は加えないはずだ」

「でも、あれを引き換えにすることはないだろ？ 無視しておけばいいんじゃないか」

「いや、あれは返してもらおうさ」

「あれを万引きしたのが僕たちだって証拠はないだろう？ もし警察に言おうものなら向こうにとっても不利になる。諦めよう、今回は収穫なし。またやればいいじゃない」

「そうじゃない。あのバッグは高かったんだ。色々手を加えたから、さらに高かった」

「はあ？ バッグのほつが大事なのかよ」

「いいや」

「じゃあ……」

「バッグのほつが、ではなく、バッグも、大事なんだ」

「あ？」

「だが心配ない。みすみす誘拐されたままにはしないさ」

岩木の計画としては、こうである。

村崎さんを引き渡すのと同時にバッグを取り返す。その時、バッグを受け取る人間が必要になるから、それを君に任せる。岩木はその後、取引現場から相手を追跡し、敵のアジトを見つけて村崎さん救出に向かう。

「岩木先生、敵地に乗り込み孤軍奮闘、一躍、英雄となるの巻だ」「アジトって……。いや岩木大先生、目的が変わってないか……？それに危険だよ。だったらバッグを受け取ったら村崎さんと一緒に逃走すれば……」

「馬鹿言え、やつらがそんな簡単にしくじってくれると思うか？」先にそつちから渡せ』とか言って銃口を向けてくるかもしれないだろ」

「ええ？ 銃って……。テレビドラマの観過ぎじゃないの」

「俺が撒かれたんだぞ。そうとうの手練てだれに違いない」

「岩木の運転が乱暴なだけで」

「まあ聞けよ。お前がドジを踏んだ場合に備えて……」

「ドジを踏むこと前提なんだ……」

「お前のことだからな」

「失礼な」

「計画は綿密に」

「ご利用は計画的に、みたいに言われても」

「精緻にして大胆に」

「はあ」

「アルサーヌ・ルパンか、はたまた怪人二十面相か」

「本の読みすぎだよ」

という感じで話が脱線するので要約すると、何かあった場合に備えて、君にも発信機をつけておくということであった。

なんだかんだで時間が経った。

取引の時刻を目前に控え、三人は指定された場所において、車の中で待機している。

岩木は、ハンドルを指先でカツカツ叩いている。

君は、助手席でその音を聞いている。

村崎さんは、後部座席でそわそわしている。

ふと、カツカツという音が止んだ。

岩木はある一点を見ている。

君はその視線の先を追った。

バッグ誘拐犯ただいま参上の巻、である。

君と村崎さんは犯人の車に近づいていく。

犯人は車から降りる。

大柄な男と小柄な男の二人組みで、凸凹コンビといった風情である。

コンビの凸のほうが顎をしゃくった。

君は村崎さんに目配せをして、それから犯人に向き直り、

「同時に」

と言った。

コンビの凹のほうが頷いた。

バッグを持っている。

君と村崎さんはほぼ同じ歩調で歩いている。

犯人の車の目の前に来た。

村崎さんは犯人に誘導されて車に乗る。

君はバッグを受け取る。

その時、相手の手に棒状のものが握られていることに君は気づいたが、一瞬遅かった。

相手はそれを振りかぶった。

頭に衝撃が走る。

視界が暗転した。

君が意識を取り戻した時、君の知らない場所にいた。どこかの事務所の一室のようである。

周囲の様子を窺おうとして頭を持ち上げると激痛が走った。殴られたことを思い出した。

ソファーに横たえられている。

目だけで村崎さんを探すと、向かいのソファーに座っていた。手足を縛られたり猿ぐつわを噛ませられたりはしていない。

君は考えた。

犯人としては、身代金を受け取るまで警察に知られないようにしたい、だから自分も誘拐されたのではないか。そういえば犯人はどこだろう。声が聞こえないだろうか。耳を澄ました。

「あ、気づきましたか？」

目を、声のほうへ向ける。

「ここまでやるつもりはなかったんですけど、すみません」
凸凹（トコトコ）コンビの凹（ぼく）のほうである。

やるつもりがなかったわりには躊躇も容赦もなかったが、と君は思う。

「あと、お嬢ちゃんよう」

今度はもう一人のほうが目撃した。言わずもがな凸（トコ）のほうである。

「気をつけなきゃ駄目だぜ。社長令嬢なんて誘拐犯にとっていい力モノなんだからよう」

自分で誘拐しておいて忠告するとは、この犯人、悪人だか善人だか判然としない。

「世間知らずのお嬢様が一人暮らしするだなんて。親御さん心配するんだらう？」

実は善人なのではないだろうか。

「そうだ、卓すくろ、若い二人に飲み物でも出してやれ」

「『若い二人』って……、僕や康史やすしさんと同じくらいじゃないですか」

どうやら凸のほうは康史、凹のほうは卓という名前らしい。名乗ってしまつていいのだろうかと思つた。

ふと、前にどこかで、この声を聞いたような気がして、君は彼らをまじまじと見た。その様子を見た卓は、

「ふえ、ふえ」

と、妙な笑い方をした。

思わず君は、あつ、と声を上げた。

「僕ね、変装が巧うまいんですよ」

アパートの住人の 正しくは“住人らしき” おじいさんは、

変装した彼だつたのだと言つ。

ということは、康史は大家さんに……いや、それはない、大家さんは本物だろう、まず体格がちがう。

君がそこまで考えたところで、飲み物がテーブルに置かれた。体を起こして、どうも、と言つと、君はそれを飲んだ。少しは疑えばよさそうなものであるが、幸い毒は盛られていなかったので君は死にはしなかつた。至つて普通のお茶である。

温かいお茶を飲んで、君はやつと人心地がついた。村崎さんとはいうと、これまた美味しそうに飲んでいる。この二人だけを見ると、日本家屋の縁側にいるのかと見紛みまがうほど呑気である。

ほつと一息ついたところで君は問うた。

「なんで変装してたんですか？」

間抜けな質問である。

「正体がばれないようにですよ」

卓は平然と答える。

「でも今は変装してませんね」

「それはそうでしょう」

「そうなんですか」

「僕たち、君と、その彼女、二人を監視していたんですよ。尾行もしました」

「じゃあストーカーって」

「言いながら、村崎さんは卓と康史を交互に見やる。」

「そうですねえ……、ストーカーと呼ばれるのは不本意ですけど…

…」

「で、誘拐する機会を、今か今かと窺っていた？」

君が問い質す。

「ええとですね、ちよつと事情がありました」

卓は、コホンとひとつ咳払いをした。

「村崎さんのご両親から頼まれましたね」

「誘拐をですか」

「まさか」

「どこの世界にわが子を誘拐してくれと頼む親がいるんですかと卓に言われて、そうですねと言って君は頭を掻いた。

「ある筋からの情報で、誘拐を企んでいる輩がいるという話を小耳に挟んだ、心配だから娘と、その周辺を見張っていてくれ、とね。暫くして、新たな情報を然るべきところから仕入れました」

「はあ、然るべきところですか」

「ええ、然るべきところですよ」

「それで」

卓は声を潜めた。

「あの岩木君にぶち当たりました」

君は耳を疑った。

「岩木が？」

「そうです。現に、軟禁していたでしょう?」

「まあ、あれを軟禁と言うなら、あるいはそうかもしれませんが」

「それで、僕たちが彼女を保護することにしたんです」

「なんで僕まで誘拐、いや、保護することがあったんです?」

「君にも協力してもらったために、です。岩木君のお友達でしょう? よく家にまで行っていた」

「よく知ってますね」

「それはそうでしょう」

「そうなんですか」

「尾行していたと言いましたよね」

ああ、そうか、と君は頷く。

「でね、僕たちは警察ではありませんから、なにも逮捕しようって
いうんじゃないんですよ。誘拐をやめさせられればいいわけです」

「僕は何をすれば?」

「はい。この狂言誘拐の人質のふりをしていてくれれば」

「それで岩木は誘拐を諦めますか」

「場合によっては、こちらも考えがあります。いずれ分かること
でしょう。岩木君は今、こちらに向かっていますよね。発信機がつい
ていましたから」

「気づいてたんだ」

「ええ」

「と、いうことは、岩木をおびき出すために僕らを誘拐した?」

君は、おや、と思った。前にも似たようなことを言ったような…

…。

「……その前に、村崎さんを誘拐するためにバッグを誘拐した」

「まあ、そうです」

「なんだってそんな回りくどいことを」
稀有な誘拐犯である。

もしかしたらこの二人も、岩木と同じ愉快犯なのではないだろうか。『ゆうかい』と『ゆかい』か、似てるな、などと君は考えている。

するとそこへ、ピンポン、とチャイムが鳴った。

康史が玄関に向かう。卓に耳打ちをする。卓は、

「来ました」

と君たちに言う。

君は、卓の手元に視線を移し、目を見張った。

「それ、拳銃……？」

断っておくが、彼らがいるのは日本である。

「ええ。三十二口径ですよ。然るべきところから入手しました」

「ああ……。然るべきところからね……」

君は、まあ具体的な経路は分からないが、それなりの入手ルートがあるのだろう、というところで落ち着いた。

康史が戻ってきた。後ろから岩木が現れた。

君は、ふと、妙だな、と思った。次の瞬間、あることに気づいた。

「畏だ」

君はそう呟き、岩木を見据えた。

「岩木、グルなんだな？」

「ほう。君にしては珍しく察しいいね」

「計画を話していた時、バッグ誘拐犯のことを『やつら』って言ったな。単独犯じゃなく、複数犯だと知ってたんだ」

「おっと、うっかりしていたよ。ご名答」

「それから、一度目は撒かれたのに、今回はたどり着いた。最初からこの場所を知っていたからだ。発信機がついていたから？ いいや、だったら一度目だって来れたはずだ」

「ご明察。ただ」

「『ただ』？」

「卓君の変装はお見事だったろう？ 僕も変装は得意でね」

君は眉を顰めた。

目の前で変装を解きはじめた。

君は息を呑んだ。

「お、お前は」

「……誰だ？」

君の目の前に、見知らぬ人間が立っていた。

「驚かせて申し訳ない。こういう者なんだがね」

名刺を差し出され、君はそれを見て読み上げた。

「熊谷浩介？ 私立探偵？」

「そう。君のこと調べさせてもらったから。あ、楽にして。ねえ、お茶を」

浩介という男はそう言うと、君の正面のソファに座った。

康史がお茶をテーブルに置いた。

君は浩介の顔を見る。

「調べた？ 僕のことを？」

「うん。全部ね」

浩介は、お茶をすすり、穏やかな調子で続けた。

「君、吉見君が、村崎さんを誘拐しようとしている犯人グループの一味だっということもね」

村崎さんは目を丸くして君を見た。

君は静かに次の言葉を待った。

「あの時……、そうだねえ、変装した卓君と君が初めて会話した時のことを憶えているかい？　そう、村崎さんついて話し込んでいた時だ。君は久しぶりに帰ってきたんだろう？　暫く留守しほりにしていただから、奇声……、いや失礼、バイオリンの音のことも、それから最近水を打ったように静かだったことも知らなかった」

「知っていたけど何の話をしているかまでは分からなかっただけ、とも言える」

「うん。だが君は知らなかったということを隠そうとした。アパートを空けていたことを覚られまいとした。岩木君と村崎さんに、だ。『静かだった』『あの奇声は……』』といった具合に、その場にいたともとれる慎重な言い方をした。何故か？　あの日まで君は、犯人グループの仲間と接触していたからだ。計画を練るためにね」

「なんで会話まで……」

「盗聴機。あと、君が言ったんだよ、岩木君もグルだってね」

「な……、嵌はめたのか」

「人聞きが悪いねえ。僕と彼は人よりちょっと悪戯いたずらが好きなだけだね」

浩介は、にやりと笑った。

悪戯で盗聴されてはたまったものじゃない。

「というか盗聴って犯罪じゃないか、などと、この期に及んで君はそんなことを考えた。」

「それからアパートね。たまたま同じアパートだったんだらうか？　もしかして偶然ではないんじゃないかと思って調べてみたんだ。そうしたら、ビンゴだ。村崎さんが越してきてから、間もなく君が引越してきたんだね」

「それは奇遇だ」

君はわざとらしく驚いてみせた。浩介はそれに構わず続ける。

「確たる証拠がなかったから、様子を見ていたんだ」

「今だつてないじゃないか、誘拐犯のグループの一味だつて証拠がそれに、この状態じゃどつちが誘拐犯だか」

君は余裕の笑みを浮かべたが、口数の多さが、内心では必死だということを実に物語っている。

「証拠、ねえ」

「それにまだ誘拐したわけじゃない」

「うん。これからしようとしていたところを邪魔されたわけだものね」

浩介は君の反撃にも動じない。君は努めて平静を保とうと、笑顔のまま言う。

「奇遇なことだね」

「そう。計画では、決行日は」

「今日、だった」

すかさず浩介が言質をとる。

「おや、認めるんだね？」

「決行日が今日だったことを？」

「誘拐犯のグループの一味だったことだよ」

「今ここで言つたところで……」

君は、はっとして言葉を切った。浩介はその表情を読み取って、「ほう、なかなか察しいいね。うん、しつかり、ここに」

と言って胸ポケットから小型レコーダーを取り出した。啞然としている君を、真正面から見据えながら、浩介は続ける。

「録音しているよ、最初からね。君がこういう状態になっているくらいだから、他の仲間がどうなっているか、だいたい想像がつくだろう？ 悪いことは言わないから、誘拐の件は御破算にするんだね」

子供を宥めすかすように、浩介は君に、いいね、と微笑む。

君はもう抵抗する気にはなれなかった。

先ほどからずっと、卓が君のわき腹に拳銃を突きつけてくるのだから、君の戦闘意欲が削がれるのも無理もないことと言えるだろう。この拳銃はそのためにあつたのかと君は痛感した。

「じゃあ」

浩介は、お開き、というふうに、パンツと手を叩いた。

村崎さんは、康史と卓と一緒に実家に帰ることになった。

残念そうであつたが、二人がなんとか言い包め……、いや、説得した。

康史は、運転ばかりさせられて不満そうな顔をしていた。

これが誘拐未遂事件の顛末である。

その後、彼らがまたここで再会することになるが、それはまた別のお話。

20 (前書き)

～あとがきにかえて～

「 という話はどうか」

「 浩介、色々と雑じゃない？ なんだかんだで時間が……って、なんだかんだの間にながあつたんだよ……。それに変装って、他人がそんなに似るかなあ？ 岩木はどうなったの？ 吉見は？ 万引きも見逃してやったの？ ご都合主義だね。あとこの『君』……吉見ってやつは僕がモデルじゃないだろうね？ 僕はこんなんじゃないよ。揉み手で、へえ、なんて言わないし」

「 そりゃ自意識過剰ってやつだぜ。別に誰がモデルでもねえよ」

「 あ、すいません店員さん、ここ、生。浩介は？」

「 俺も」

「 生二つで。はい」

「 ああ、なんでこう実際は浮気調査ばっかなんだろうな」「事務所の宣伝でもしたら？ 街頭でティッシュ配るとか、……アンケートとるとか」

「 武がや^{たけ}ってくれんのか」

「 僕は遠慮しとくよ」

「 水くせえなあ、同じ釜の飯を食った仲じゃねえか」

「 ここでだろ」

「 幼馴染でもある」

「 腐れ縁だよ」

「 飲みにくる仲で……、そういえば、さっき頼んだ生はまだか」

「 居酒屋は忙しいんだよ、浩介と違って」

「 ……なんだよ、最近は依頼が来てだな」

「 はいはい。……しかし生ビール遅いな」

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3248j/>

誘拐喜劇

2010年10月8日15時13分発行